



服飾史家
中野香織さんに聞く

ロイヤル婚のレジェンド、 美智子様とグレース公妃の魅力

1956年のグレース公妃、1959年の美智子様。'50年代の出来事でありながら、私たちに強い印象を残すレジェンド的存在、お2人のロイヤル婚が意味したことは？ 中野香織さんが解説します。

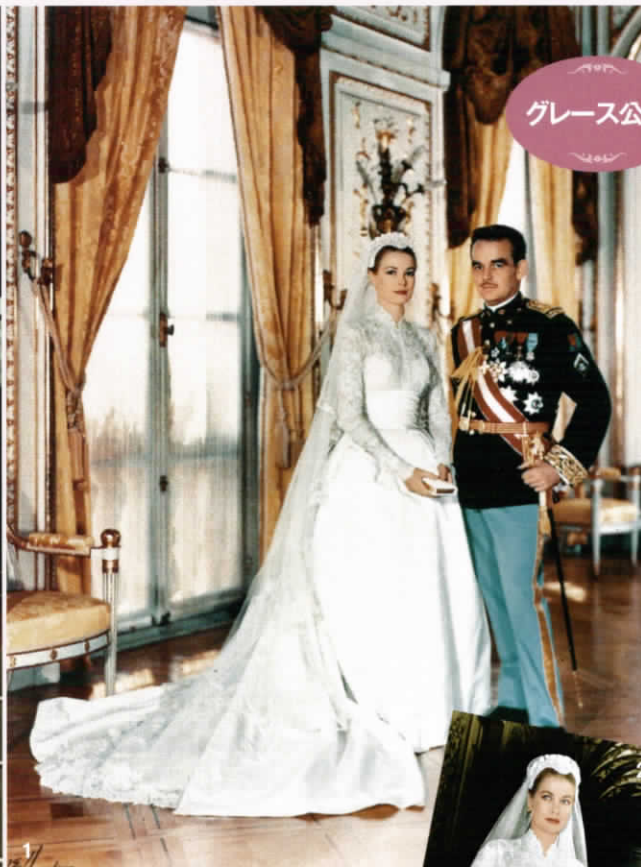
美智子様



清潔さと誠実さを備えた
唯一無二の美しさが生きたドレス

ローブデコルテの生地は、龍村美術織物が製作した明輝瑞鳥錦と呼ばれるもの。「日本が誇る絹とフランスのデザイン、当時最も優れたものの組み合わせですね。厚手のシルクタフタが上品で、健康的な美智子様の美しさに本当に合っています」

グレース公妃



ハリウッドの黄金時代の象徴、
アメリカの夢が託されたドレス

「レッドカーペットの上でホイップクリームのようにふわふわ揺れるように計算して作られたトレン、ヨーロッパでの式にぴったりな1950年代アメリカには異例のシンプルなシルエットなど、まさに映画的な視点でデザインされたドレスです」



中野香織さん
なかの・かおり ● エッセイスト、服飾史家。東京大学大学院修了、英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆家に。ファッション史から最新モードまで幅広く研究。明治大学国際日本学部特任教授を務める。最新刊「紳士の名品50」(小学館)。

「結婚前のグレース・ケリーといえば、人気、美貌、ふるまい、すべてにおいて絶頂の女優。そのスターがプリンセスにという、映画の延長のようなことをやってのけたのが、世界中の人にインパクトを与えた一番のポイントです。そんな彼女のウエディングドレスはMGMのコスチュームデザイナー、ヘレン・ローズが映画の視点でデザインした、完成度という域を超えた美しさ。米国人にとって、アメリカの美しい製品という意味合いがありました。スター俳優がずらりと並んだ結婚式も含め、彼女の結婚はハリウッドの威信をかけたアメリカンドリームの特徴だったのです。」

一方、クリスチャン・ディオールがデザインし、ムッシュの死後イヴ・サンローランが引き継いで完成させた美智子様のローブデコルテも、1959年という日本経済が上り調子のときに作られたもの。誠実で清潔という美智子様のイメージにぴったり合っていました。西洋のトップデザイナーのローブを堂々と着こなす日本のプリンセスは、当時の日本人にとってどれほど自慢だったことか。ファッションからテレビの普及促進まで、高度成長を押し上げるほど憧れの存在でした。

お2人には、美しさだけでなく背景も含めて記憶に残る唯一無二の存在という共通点があります。そしてウエディングドレスは流行があるように、着る女性の人柄に本当に合ったデザインや素材になったとき、タイムレスになることも教えてくれました」

タイムレスを体現するお2人